

I - D (45)

肺小細胞癌剖検例の臨床病理学的検討

長崎大学第2内科

○神田哲郎、河野謙治、船津 龍、岡 三喜男、
植田保子、奥野一裕、堤 恒雄、斎藤 厚、
原 耕平

長崎市民病院内科

中野正心、池辺 璋

佐世保総合病院内科

籠手田恒敏、坂本裕二、松本武典、石崎 驍

肺小細胞癌は肺癌の中でも悪性度が高いといわれるが、一方制癌剤や放射線治療に反応する事から内科的に注目されている。我々は剖検例33例について、その臨床経過と剖検時における腫瘍の広がり、原発部の状態、合併症、死因などを検討し、これまでの内科的治療の問題点を明らかにせんとした。

昭和43年から54年までの長崎大学医学部第2内科にて剖検された21例、及び関連病院にて剖検された12例の計33例の肺小細胞癌を対象とした。男女別では男性29例、女性4例、年齢別では60才代10例をピークとしていた。治療は、放射線のみ6例、放射線+制癌剤16例、制癌剤8例、無治療3例であった。

原発部は33例中32例が肺門部原発で、左上、右上、右下、右中間気管支の順に多かった。転移臓器は肝臓16例(48.5%)、対側肺、副腎、脳、脾臓の順で、リンパ節では肺門、旁気管の順に多かった。治療別による原発部の病理所見は放射線6例では壊死2例、線維化+腫瘍2例、線維化1例、腫瘍1例であった。これに対し制癌剤では8例中4例が腫瘍で、線維化+腫瘍、線維化、壊死+腫瘍、壊死は各々1例であった。制癌剤+放射線では線維化+腫瘍が15例中8例、線維化3例、壊死+腫瘍、壊死が各々2例であった。治療法と死因との関係を見ると、放射線では6例中3例が癌死であり、脳転移1例であった。制癌剤では8例中5例が癌死であったが、間質性肺炎が3例みられ、放射線+制癌剤では16例中癌死6例、脳転移4例、間質性肺炎4例、感染症2例であった。この感染症は、カリニー肺炎、カンジダ敗血症の各々1例であった。また、33例中に胃十二指腸潰瘍7例、悪性腫瘍4例(甲状腺癌、早期胃癌、肺癌、前立腺癌)が合併していた。

考案

肺小細胞癌33例の剖検例について臨床病理学的に検討した。男性に多く、肺門部原発が大多数を占め、原発部は制癌剤+放射線療法で33%に線維化あるいは壊死を認めた。一方、間質性肺炎や感染症にて死亡した例が33例中9例にみられ、内科的治療の難しさを物語っていた。

I - D (46)

"気管支腺腫" 10例の臨床的検討

結核予防会結核研究所附属病院外科

○徳田 均、小山 明、守 純一、安野 博
同結核研究所病理 河端美則、岩井和郎

1965～81年の間に結研附属病院で経験した"気管支腺腫" 10例(カルシノイド6、腺様嚢胞癌4、粘表皮癌0)に就き、臨床的事項を中心に検討を行った。

カルシノイドは、年齢は17～50才に分布し30才代が3例と多く、性別では男3、女3と同数であった。臨床症状は無症状検診発見3、血痰、咳各1、反復する肺炎2であり、X線所見は末梢腫瘤影3、二次影(無気肺・肺炎)2、腫瘤影+二次影1であった。発生部位(気管支次数)はⅡ次2、Ⅲ次1、Ⅳ次2、Ⅴ次1、腫瘍の発育型式は管内型3、管内管外型1、管外型2、この両者の関連をみると、既に言われている如く中枢発生は管内型、末梢発生は管外型を示す傾向が明らかで、また前者はX線上二次影を伴い、後者は末梢腫瘤影を呈するのみであった。5例に気管支鏡を施行し4例に気管支内腔に発育する粘膜を被った淡黄色～淡赤色の球状腫瘤を見出した。生検は4例に施行し2例でカルシノイドの確診を得た。全例に肺葉切除+リンパ節廓清を行った。リンパ節に転移を認めた例はないが、1例が手術時肋骨転移を発見され非治療切除となった。この例が2年7ヶ月後腫瘍死した他は、6ヶ月～15年を経た現在全例健存中で、カルシノイドの切除後の予後は比較的良好といえる。内分泌学的検索は2例に行い1例に尿中5-HIAAは正常値なるもののACTHの異常高値を認めた。臨床的にカルシノイド症候を呈した例はない。

腺様嚢胞癌は、20～52才に分布し、全例男性である。発生部位は0次(右中幹)1、Ⅲ～Ⅳ次3、0次の1例は管内管外型の発育形式を示し、反復する肺炎を主症状とし、X線的には末梢二次影を主体としたのに対し、末梢発生の3例は管内管外型及び管外型の発育を示し、臨床的には無症状で、X線上は1例が腫瘤影+二次影、2例が末梢腫瘤影であった。3例に気管支鏡を施行し2例に淡色球状腫瘤が内腔を閉塞しているのを見出した。1例に生検を行ったが結果は腺癌の疑診であった。従って腺様嚢胞癌で術前に確診しえた症例はない。1例に全別、3例に葉切を行った。廓清リンパ節にはいずれも転移を認めなかった。予後を見ると2例が1年及び8年3ヶ月で死亡しているが腫瘍死かどうかは確認できなかった。他の2例は1年6ヶ月～13年現在健在である。

これら症例に就き更に病理学的検討も加え併せ報告したい。